

隠岐地方

このかかささんいつ来てみても (手まり歌)

収録・解説・酒井 董美 イラスト・福本 隆男



や旧布施村で聞かされているが、具体例として旧布施村布施の口説きを紹介する。ただ、途中、囃子言葉として「ア、ドッコイシヨ」とか「ハ、オートシエ」が入るが、それは省略して記しておく。



このかかささん いつ来てみても  
紺の前掛け茜のタスキ  
掛けて港へ塩汲み下がる  
沖の船頭さん ちらちら招く  
招く船頭さんに 木綿糸もろて  
何に染めかと 紺屋に問えば  
一に橘 二にカキツバタ 三に下がり藤  
四に獅子牡丹 五つ井山の千本桜  
六つ紫いろいる染めて 七つ南天 八つ山  
桜 九つ小梅をいろいる染めて  
十で殿ごさんの 好いたように染めた

(昭和52年7月30日収録)

☆伝承者 藤野コヨさん・明治38年生

解説

隠岐の女性は実によく働く。それを反映しているのか、この手まり歌には、このように「このかかささんいつ来てみても」で始まるものが、あちこちで聞かれる。しかし、不思議と本土になると、「一で橘」以下の後半部だけの歌ならともかく、前半部を持ったこの類の歌に出会うことはない。

さて、ここでは手まり歌としてうかがった。同様に隠岐郡西ノ島町でもそのように聞いたが、実は盆踊りの口説きとしても、この歌はうたわれていた。それは同郡の旧西郷町と旧五箇村

このかかさま いつ来てみても  
朝は早起き 朝髪上げて  
紺の前掛け茜のタスキ  
掛けて浜へと 塩汲み行きやる  
沖の船頭さんが ちらちら招く  
招く船頭さんに さらし三尺もろた  
帯に短し タスキにや長し  
何にしようかと 紺屋に問えば  
そこで紺屋の 申するのには  
一に橘 二にカキツバタ 三で下がり藤  
四で獅子牡丹 五つ井山の千本桜  
六つ紫いろよに染めて 七つ南天  
八つ山桜 九つ小梅を ちらりと染めて  
十で殿ごさんの 好いたように染める

(灘部修作さん・昭和23年生)

こうして眺めれば、大人の民謡である「盆踊り口説き」と子どもわらべ歌である「手まり歌」が、互いに交錯していることが分かる。前回紹介した次の歌、

向こうの山で鹿が鳴く  
鹿どん 鹿どん なぜ鳴きやる  
何にも悲しゆはないけれど  
六十ばかりのご隠居が  
肩には鉄砲 手に火縄  
むく毛の犬めを先につれ  
虎毛の犬めを後につれ  
むく行け 虎行け けしかける (以下略)

も同様である。紙面の都合で他は省略するが、このような例はまだまだ存在している。

(元島根大学法文学部教授)